

平成 21 年 6 月 25 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19700513
 研究課題名（和文）指導者の語りと指導の社会的構成
 研究課題名（英文）Construction process of coach's narrative and social construction process of coaching
 研究代表者
 梅崎 高行（UMEZAKI TAKAYUKI）
 九州ルーテル学院大学・人文学部・准教授
 研究者番号：00350439

研究成果の概要：競技スポーツにおける指導の構成過程を、Process Product 的な研究に代わり、社会文化的な視点によって検討した。サッカーチームの 1 シーズンを対象としたフィールドワークを実施し、主たる指導者であるチームの監督の、指導中に選手名を呼ぶ行為に焦点化した分析を行った。この結果、指導者の固定した働きかけが、量的・質的に確認された。一方、選手を対象としたインタビューの分析から、指導者の評価もまた、選手間で相互に構成され、固定性を帯びている可能性が示唆された。以上の結果から指導の固定性は、単に指導者の責任に帰することはできない。むしろ、場を構成する〔教える者 教えられる者〕間の相互行為の産物と捉え、指導者は無自覚な実践を脱却できるよう、選手は必要な働きかけを享受できるよう、場を多声的な状況に変えていく必要が考えられた。そこで、監督を支えるコーチの発言を含めた分析を行ったところ、指導の相似的現象の回避を前提とした指導の協働に、場を多声的な状況に変えていく可能性が見出せるとして、今後の検討課題とされた。また、ダイナミックなスポーツ文脈を対象とした研究の課題についても議論された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計			1,250,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・1402 スポーツ科学

キーワード：競技スポーツ，社会文化的視点，選手名を呼ぶ行為，指導の構成過程，指導の相似的現象，指導の協働

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

筆者は、自らの実践を振り返る指導者の語りの分析から、指導そのものは個々に多様であるにもかかわらず、「選手の動機づけを考慮した」といった語りに回収されてしまう点に注目している。このことは、選手を動機づける指導に多様性があると考えよりむしろ、指導者の語りが指導の現場で支配的な物語 指導者は選手の動機づけを考慮しなければならない に、からめとられていると考えざるを得ない。

無論、これらのドミナントな語りが、聞き手の聞きやすさに配慮され、容易に他人の納得を得る点や、繰り返し語られることで、指導者コミュニティの知の安定に貢献する点を見逃すことはできない。しかしながら、よくある語りに回収され、指導の独自性やかかげのなさが失われるのであれば、それは指導の発展の阻害である。殊に、指導者が自らの実践を省察する可能性を単一の語りへと狭める点で、マイナスだろう。

本研究は以上のような背景から着想し、社会構成主義的に指導者の振り返りを捉え、指導改善に貢献しようとするものである。

2. 研究の目的

指導者の語りが〔指導する者 される者〕および〔指導する者同士〕の関係性のなかで構成されていることを明らかとし、このことを通じて、自明とされる指導者の働きかけの具体的達成を問い直す。

3. 研究の方法

(1) 調査対象者 Jリーグ所属クラブのうち、本研究では、九州圏の一地域をホームタウンとするクラブを対象とし、同クラブの中学生年代 X チームにおいてフィールドワークを行った。調査の対象は、X チームを指導する指導者 A 監督 (男性, 34 歳) と B コーチ

(男性, 36 歳), さらに X チームに所属する中学生男子サッカー選手 35 名であった。

(2) 調査期間 X チームの 1 シーズンにあたる 200X 年 2~9 月を調査期間とした。プロクラブ下部組織における中学生年代のチームは、一般に 1 月中旬から 2 月初旬の間に次年度の中学 2~3 年生で構成される新チームへと移行する。X チームは調査期間とされたこの年、地域予選を勝ち抜くことができず、全国大会に出場できないまま、9 月初旬でシーズンを終えた。

(3) グルーピング 調査に先立ち、A 監督に選手評価を依頼した。選手評価は、「技術」、「身体能力」、「戦術・役割理解」、「モチベーション」、「パーソナリティ」、「可能性」の 6 項目について行われた。

評価に当たって A 監督には、選手 35 名の項目それぞれについて、最低 1 点から最高 5 点の範囲内で評定することが求められた。選手たちは、得点の隔たりを手がかりに、各グループが同程度の人数となるよう線引きされ、3 群化された。本研究では、高得点群を優秀層 (n=10, 層平均 3.80 点)、中得点群を中間層 (n=12, 層平均 3.22 点)、低得点群を問題層 (n=13, 層平均 2.87 点) と呼ぶ。

(4) 手続き A 監督と B コーチによる X チームのトレーニングを対象として、期間中に合計 7 回のフィールドワークを行った。トレーニング前後には、A 監督に対しインフォーマルインタビューを実施した。トレーニング中は、フィールドノーツに指導の様子を記録するとともに、A 監督に焦点を当てたビデオカメラで撮影を行った。このとき A 監督には、IC レコーダーとワイヤレスマイクロフォン

の装着を依頼し、指導中の発話を録音した。録音された発話はすべて逐語録化され、分析の資料とされた。このとき同時に収集された B コーチの発話も逐語録化され、最終的な分析に含められた。

4. 研究成果

フィールドワークで得られた A 監督のコーチング数は 1,069 であった。後に分析に含められる B コーチのコーチング数は 265 であった。なお、年間 30 試合に及んだ公式戦出場回数と、A 監督による評価得点の間には、有意な相関が確認された ($r=.54, p<.01$)。

(1) 量的分析 各層に対するコーチング数の変化を時系列的に検討するため、層(3)と月(7)を要因に組み入れた二元配置の分散分析を行った。この結果、層 ($F(2, 32)=3.32, p<.05$) と月 ($F(6, 192)=3.11, p<.01$) の主効果および層と月の交互作用 ($F(12, 192)=1.87, p<.05$) が有意であった。各層に対する月別のコーチング数では、4月 ($F(2, 32)=8.86, p<.01$) と 8月 ($F(2, 32)=3.48, p<.05$) の単純主効果が有意であった。Bonferroni 法による多重比較の結果、5%水準で、各月における優秀層 ($M=7.71, SD=1.14$) と中間層 ($M=3.77, SD=1.04$) の平均コーチング数には、有意な差がみられた。

以上の結果から、指導者による働きかけの量的な偏りが確認された。特に、優秀層と中間層との間で、シーズン当初にみられたコーチング数の差が、トレーニングを経て拡大していく様子が確認された (Figure 1)。

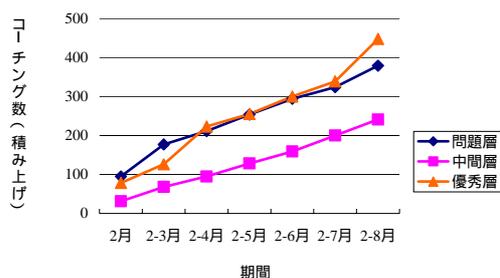


Figure 1 A監督コーチング数(積み上げ)

(2) 質的分析 次に、働きかけの質的な差について分析を行った。目的は、コーチングの内容分析から、選手に対する働きかけの質を同定することであった。分析は、コーチング前後の文脈を考慮しつつボトムアップ的に行なわれた。

分類のための指標は、収集されたすべてのコーチングを眺めるうちに、個々のコーチングを互いに差別化し、働きかけの質を同定する上で適当と判断されたものが、最終的に 7 カテゴリー準備された。指標に従い、研究協力者 1 名と共に分類を行ったところ、初期一致率は 76% であり、意見の相違は議論によって再分類を行った。

χ^2 検定の結果、各層に対する働きかけの質的な偏りは有意であった ($\chi^2(12)=33.2, p<.01$)。各層ごとに享受した働きかけの概要を述べれば、問題層はネガティブな働きかけが多く、他層に比べてよく〔叱〕られていた。また、間接的・統制的・親和的な働きかけは少なかった。中間層は、他層に比べてポジティブ・間接的・統制的な働きかけが多く、特にプレーに直接関係のない場面で〔指示〕を受けることが多かった。優秀層は、ポジティブ・ネガティブいずれの「評価」も少なく、代わってプレー前・中の直接的な「示唆」が多かった。また、トレーニングを休んだ際に、他の選手の前で〔確認〕される機会も多かった。

(3) 微視的分析 働きかけの質的な差をさらに検討すべく、微視的な水準で分析を行った。ここでは指導技法の一つであるフリーズ場面のコーチングに着目した。この技法は、働きかけそのものが選手間で可視化されやすいという特徴をもつ。

期間中には、全部で 27 のフリーズ場面が観察された。そのうち、量的・質的分析の結果を踏まえて分析されたフリーズは、13 場面

であった。各場面で「対象」となった層の登場回数は、優秀層が9場面、問題層が4場面、中間層が2場面であった（重複含む）。

例1は、優秀層に対するフリーズ場面の発話である。シュート場面における発話であり、勝敗に直結するサッカー競技の本質的な場面に相当する。この大事な場面において、優秀層の選手がフリーズされ、厳しい詰問の対象とされている。

例1 優秀層へのネガティブ・直接フリーズ

ストップストップストップ！キーパー持って。シゲル，そこおったよな？[4] ほしいこれー？もらったらシュート打てるじゃないのあなた

次に例2は、問題層にグルーピングされた選手タツヤをフリーズし、〔否定〕の対象としながら、直後には、優秀層の選手シゲルに対して〔発問〕が起こる場面である。コーチングを重ねることで場面の重要性が際立つが、一方で、フリーズ中に指導者の意図を汲み、〔発問〕にも答えられたであろうタツヤや、このような場面でまったく〔発問〕の対象とならない中間層の選手が浮き彫りとされる。

例2 問題層へのネガティブフリーズ+優秀層への間接フリーズ

はいストップ。[略] こうやっておんなじ方向にいてシュートをうってる人があるぞータツヤ。これで逆を取れる？[略] ありえるかー？シゲル

さらに例3は、層の3選手がコーチングされる発話である。中間層の選手にとって、フリーズ場面でコーチングされる稀有な機会であった。しかしながら、ここで3選手は単に、改善すべき状況の再現役に過ぎないことが、前後の文脈から示される。

例3 中間層への統制フリーズ

（問題層への発問後、現象再現役として中間層に）ねー？わざとーマサヒコ，ねー，ジヨウが向こうユウイチボール持ってて，[3] そこで持ってて，[略]

以上の微視的分析から、量的・質的分析によって偏りが確認された指導者の働きかけをさらに掘り下げた。

ただしこのような学びの問題は、指導者のみには帰属ではない。以降では、選手に対するインタビューから、この問題を検討する。

（4）インタビュー分析 分析対象は、享受する働きかけが量的・質的に乏しい2層（中間層と問題層）から、一年にわたるフィールドワークの最終日に語りを収集できた3年生9名であった。「指導者の悪かった点を教えてください」という質問に対する選手の回答からは、「気分屋」というキーワードが抽出された。この結果から、指導者は選手の個性を捉えようと努めながら、現実には、働きかけに対する一様の反応から、選手を層ごとに把握せざるを得ない状況が生まれていた可能性もうかがえる。このときに考えられる点は、指導者が対峙していた選手たちは文字通りの一人ひとりではなく、指導者の働きかけに判で押したような反応を示す一枚岩ではなかったかという点である。仮説的にこのよう

な関係を、指導の相互バイアスの構成としてモデル化した (Figure 2)。

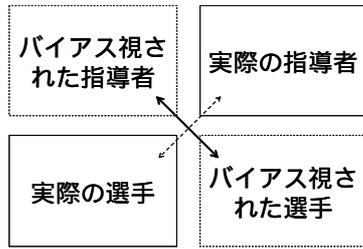


Figure 2 指導の相互バイアスの構成
(本体行なわれるべきやりとりを点線矢印で、現実のやりとりを実践矢印で示した)

このように指導の相互バイアスの構成の可能性を考えると、中間層に位置する選手への働きかけの偏りは、単に指導者の無自覚性さえ問えばよいという問題には帰結できない。教える側と教えられる側が、それぞれ単一の声に閉じるこの状況を、揺り動かすような別の声が求められるのである。Wertschは、このような声に媒介されて動く社会的実践のありようを、‘多声性 (multivoicedness)’と表現している。そこで A 監督と選手にかかわり、場を多声的な状況にできる B コーチに着目する。

(5) B コーチのコーチングを含めた全コーチングの分析 B コーチのコーチング (265) を含めた全コーチング (1,334) について分析を行った。 χ^2 検定の結果、A 監督と B コーチのコーチングについては、7 項目中 5 項目について統計的に有意な特徴差が確認された。概要を述べれば、B コーチは A 監督に比べて多く、ポジティブ ($\chi^2(1)=21.4, p<.01.$) で直接的 ($\chi^2(1)=21.0, p<.01.$) な発話を行っており、その一方で、間接的 ($\chi^2(1)=8.8, p<.01.$)・統制的 ($\chi^2(1)=46.9, p<.01.$)・親和的 ($\chi^2(1)=7.9, p<.01.$) な発話を控えているといえる。

例 4 は、B コーチの発話を含めて分析を行ったところ、中間層の受けた働きかけが増し

た 5 月の指導実践から、多声的な状況がもっとも凝縮したかたちで生じたと思われる 3 分間の発話を抜粋して示した。

例 4 指導の多声性と協働 (開始 45 ~ 48 分)

- 01 A: 時間差をつくって。キーパーのために時間差をつくって_[1]。ケン からや、ケン から [略]
- 02 B: どうした、マサキ
- 03 A: [略]リアルがあるのは、ねー。ワンツーと見せかけて逆を取る方がリアリティーがあるな。はい行こう_[1]
- 04 B: ナイスボール、タイチ_[4]
- 05 A: 最後ーインサイドだったぞコウイチ。どこに当てるのー?_[2] [略]
- 08 B: おーナイス、ゴロウ_[4]。おーナイスマサキー_[4]
- 09 A: 見るタイミング
- 10 B: おー、オッケオッケサトシ_[4] [略]
- 11 A: いっぱい空いてるよケン。空いてるところ。はは(笑い)_[3]、落ち着いて。ねらって。うおー、はい [略]
- 12 B: ナイスマサキ_[4] [略]
- 13 A: [略]さっきから言ってるだろケン。こう来てるんだから逆を取ってって意味よ。[略] そうじゃない? そうやる?_[2]

注: A...A 監督, B...B コーチ, 下線_[数字]...両指導者の特徴的なコーチング ([1]=統制的, [2]=間接的, [3]=親和的, [4]=ポジティブ), 選手名横の丸数字...層 (=問題層, =中間層, =優秀層), (笑い)...発話者の笑い

ここに示されるように、A 監督が選手を統制し (下線_[1])、間接的に発問し (下線_[2])、ときに親和的に接しながら (下線_[3])、トレーニ

ングを進めている。一方 B コーチは、その間隙を縫うように、ポジティブな短い働きかけを行っている(下線^[4])。このようにして中間層は、量的・質的に、A 監督単独で進められる指導実践とは異なる働きかけを享受している。現時点では推測の域を出ないが、複数の指導者による協働は、指導の偏りを遠ざける一つの方略と期待される。

ただし、スポーツ指導の文脈でよくある協働は、チームの選手を二分し、一方を監督が、一方をコーチが指導するという形態である。このとき得られたコーチングを量的に分析すると、A 監督が指導するグループと B コーチが指導するグループのそれぞれに、「指導の相似的現象」と呼ぶべき指導の偏り 中間層に対する働きかけの少なさが確認された。したがって、協働が多声性を生起させる上で有効であるとして、単に協働しさえすれば指導の偏りが回避できるということはできない。よい協働の条件として、指導の相似的現象の回避が前提とされる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

- 1) 梅崎高行 (投稿中) 選手名を呼びながら行うコーチングにみる指導の偏り サッカー指導の一実践を対象として 教育心理学研究 査読有

〔学会発表〕(計 8 件)

- 1) 梅崎高行 (2008) 指導者の働きかけによる中間層の構成 日本発達心理学会第 19 回大会発表論文集 Pp. 627. 平成 20 年 3 月
- 2) 梅崎高行 (2008) 指導者の働きかけと選手の位置に関する考察 日本発達心理学会 Social Motivation 研究分科会 サマーカンファレンス 2008 富士箱根 未公開 平成 20 年 9 月
- 3) 梅崎高行 (2008) 指導者の働きかけによる中間層

の構成(2) 質的分析による呼称の解釈 日本心理学会第 72 回大会発表論文集 Pp. 1308. 平成 20 年 9 月

- 4) 梅崎高行 (2008) 指導者の働きかけによる中間層の構成(3) 微視的分析による指導の構成と指導者による協働の可能性と問題 日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集 Pp. 769. 平成 20 年 10 月
- 5) 梅崎高行 (2008) 指導者の働きかけによる中間層の構成(4) - 個への再注目 - 日本パーソナリティ心理学会第 17 回大会発表論文集 Pp. 222-223. 平成 20 年 11 月
- 6) 梅崎高行 (2009) 選手は指導者の働きかけをいかに認知しているか 日本発達心理学会第 20 回大会発表論文集 Pp. 276. 平成 21 年 3 月
- 7) 梅崎高行 (2009) サッカー指導における指導の相互バイアスの構成 第 7 回スポーツ動機づけ研究会 未公開 平成 21 年 5 月
- 8) Takayuki UMEZAKI (2009) Construction process of coach's narrative: The possibility and problem of coach's cooperation. The 12th International society of sports psychology World Congress of sport psychology, Marrakesh, June 17-21, 2009, Pp. 未定. 平成 21 年 6 月

〔図書〕(計 1 件)

- 1) 梅崎高行 (印刷中) 質的研究 寺澤美彦・田中あゆみ・黒石憲洋(編) 『ヒューマン・モチベーション 理論編』 ナカニシヤ出版

〔産業財産権〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梅崎 高行 (UMEZAKI TAKAYUKI)
九州ルーテル学院大学・人文学部・准教授
研究者番号：00350439